

仏教の示す自利・利他

吉田 顯成

大乘仏教の理想は、自利利他の実践と言われます。自らを利するとともに、他をも利するという両方がともに完全に行われることです。近年、企業活動、さらにはボランティアなどの社会的実践においても、この自利利他ということはよく使われる言葉と思いますが、仏教の理想と社会的な理想は似ているものの、格段の違いがあるものです。

「利」は一般には利益（りえき）のことです。社会的に使われている利益は、得すること、儲けのことであったり、役に立つこと、ためになることです。

仏教の「利」も利益と漢字で書きます。しかし「りやく」と読むところが違います。神や仏にお願いすれば、得する、儲ける、自分の思い通りになるということが御利益であるとする教えはたくさんありますが、これが結果的に、迷いを深めることになるのです。

仏教で言う正しい利益（りやく）は、仏になること、迷いの世界を離れることです。こう聞くと、つい、それも得したことであり、役に立つことであると思われるかもしれませんが、そういう次元から離れることなのです。しかし、どっぷりとこの世の中の損か得か、有用か無用かという世界に浸っているのですから、仏教そのものが役に立たないものになってしまっています。人のそのような悲しいあり様を、親鸞聖人は、阿弥陀如来の法の鏡に照らされて「凡夫」とであると言われました。

「凡夫」とは、サンスクリット語では「プリータークジャナ」と言い、「隔てをおいて生を営むもの」と直訳できるそうです。私たちは、まさに阿弥陀如来に照らされる中、社会の現実に向きあって進むことで、あらためて「凡夫」として不十分、不完全であることを知らされると共に、そのことを自覚しつつ、少しでも「利他他者の喜びを自らの喜びとする」生き方を願いとして、歩みを進めていきたいものです。念仏が私の自利利他を成就してくれるのです。